

ビキニ被ばく 絵本に

静岡の元教員「教訓を子どもに」

出版した。昨年から今年にかけて交流していた関係者が相次いで亡くなった。「ビキニ被ばくは現代につながる問題」。教訓を伝え続けようという決意を新たにす

る。同県焼津市で開かれた2004年の「3・11ビキニデー集会」。元乗組員、大石又七さん(86)の体験に耳を傾けた。「自分の子どもが死産だった」。教職員組合の関係もあり、集会には毎年参加していたが、元乗組員の話を初めて心で受け止めることができた。

静岡県島田市の元高校教員、粕谷たか子さん(70)は、米国のビキニ水爆実験で被ばくした遠洋マグロ漁船「第五福竜丸」の元乗組員らを描いた絵本を自費

するようになり、10年にはニューヨークのデモ行進中、大石さんと再会した。

「ビキニ被ばくは世界で知られていない」。大石さんの言葉に粕谷さんは「原水爆禁止の運動につながった重要な意味をもっと広めなければ」と思いを強くしたという。

退職後の13年以降、高校生を引率して見崎進さん(昨年2月死去)や池田正穂さん(今年2月死去)を何度も訪ね、被ばく時の体験やその後の差別に苦しんだ半生を聞き取り、若い世代との橋渡し役を担った。18年には友人2人と協力し、被ばく半年後に亡くなった無縁長、久保山愛吉さんとその家族を描いた絵本「ばらの祈り 死の灰を越えて」を自費出版した。3千部を完売、増刷もした。

親交を深めてきた見崎さん、池田さんが相次いで亡くなり、当時を知る関係者は大石さんら3人になった。願いは「若者たちが新たな語り部になること」だ。



「第五福竜丸」の元乗組員らを描いた絵本を手にする元高校教員の粕谷たか子さん(静岡県島田市)

潮流

「被爆地」はヒロシマ、ナガサキだけではなかった。イギリスが1950年代

核実験を12回も強行したのはオーストラリアの先住民(アボリジニ)の大切な土地でした▼高知の太平洋核被災支援センター副代表で英文付き写真集『NO NUKES』を出版した岡村啓佐さん。ことし1月、回国を訪れ、先住民被書者のスー・ハセルタインさんらと交流しました▼スーさんは2歳のとき、南部のエミュー平原の核実験で被災。

「この実験のとき、黒い霧が発生し、風によって流れてたくさんの人が被ばくしがんなどで亡くなり、今も多くの女性が悩まされている」と告発します▼核保有大国は核実験大国でもあります。ソ連(現ロシア)はセミパラチンスクで456回の核実験、中国はロプノール地域で45回の核実験を強行。アメリカが1954年にマーシャル諸島ビキニ環礁で行った核実験の威力は、広島型原爆の3200倍です。マーシャル諸島島民をはじめ、第五福竜丸など900隻以上の日本のマグロ漁船も被災し、汚染は北半球全体に▼はかりしれない世界の核実験被害は、国際的な人権問題です。核兵器禁止条約6条には、「核兵器使用または実験による被害者」にたいする援助などをあげています▼禁止条約を批准した国は36カ国となり、発効は時間の問題です。「核実験被災船員の救済」を掲げて日本のマグロ漁船元乗組員らが始めた「ビキニ労災訴訟」は、世界の核被害者の救済を先駆ける国際的な意義あるたたかいです。